

対人地雷被害者のいない 世界を実現したい!

何も特別なことじゃなくて、
ちよっと手助けするだけ

きっかけ

この話は何度したかわかりません。講演会のたびに質問されてきました。今でも質問されます。「なぜ、あなたは対人地雷問題（なにか）に足を踏み入れたのですか」と。

私の答えはいつも同じです。「対人地雷」で足を吹き飛ばされたカンボジアの小さな男の子のことを紹介した新聞記事を読んだのがきっかけです」。

そんな理不尽な話があつていいのか、と怒りとも悲しみともわからない感情に圧倒され、涙を流しながら何度も記事を読み返したことを覚えています。今でもリアルに、死んでいくその男の子の光景が浮かぶくらいです。

当時私は45歳でした。人生がこのまま終わるのでは、これまで生きてきたことが何かむなしと感じ始めていました。ただ、積極

的にボランティア活動に身を投じることに二の足をふんでいました。漠然と、ボランティアは偽善的だと決めつけていたからです。

しかし、カンボジアの地雷被害を受けた小さな男の子の新聞記事が私の心を揺さぶり、具体的な行動に駆り立てました。ボランティアに参加するという気持ちはまったくなかったのですが、たまたま当時勤務していた生涯学習センターで講座を担当していたので、手始めに一般市民向けに連続10回の「対人地雷問題講座」を開催することにしました。1998年のことです。

逆風

この講座の提案に対して事前協議をした市教育委員会事務局からかなり強い抵抗がありました。1997年に対人地雷全面禁止条約が成立し、日本も調印していたので



白井 敬二

名古屋市中川区富田支所

【しらい けいじ】1953年、愛知県生まれ。現在名古屋市中川区富田支所に勤務。福祉の現場で長く働く。2011年5月～2012年3月、陸前高田市にて勤務。1998年から対人地雷問題に取り組む。中部地雷問題支援ネットワーク代表。

ですが、また日本では一般市民が対人地雷の深刻な被害状況を知る機会が少なかったのです。

つまり、市民からの需要がない講座を敢えてやる必要があるのかという反対でした。確かに、戦後の日本には対人地雷の埋まった地雷原がありませんでしたので、当然市民に差し迫った危機感もありませんでした。

ただ、当時周りの反対を押し切って対人地雷禁止条約に署名した小淵恵三外務大臣（後、総理大臣）の逸話も結構知られており、一部の人たちに対人地雷禁止運動の機運が芽生え始めていました。

紆余曲折はありましたが、当初から私の対人地雷被害の話に耳を傾け、支援してくれた同僚たちの後押しもあり、結局私の対人地雷問題講座案は了承されました。

何事につけ、わずかでも慣例に沿わないことをすればすんなりとことが運ばないのは



どこの世界でも一緒です。決してお役所だけではありません。ダメ出しされてからが本番、くらしいのポジティブな気持ちで目前の困難に取組みましょう。案外道は開けるものです。少々の反対にあつたからといってすぐに諦めないでください。「捨てる神あれば、拾う神あり」ですよ。

対人地雷禁止キャンペーン活動家との出会い

さて、何とか講座案を名古屋市役所の正式講座として認めていただいたものの、10回にわたる連続講座の講師陣がほとんど決まっています。自宅で不慣れなコンピュータを使い、インターネット検索をし、片端から連絡先に電話して講師の依頼をする日々が続きました。

ここで大きな障害になったのが「謝金」でした。講師の謝金は極めて低額なのです。

例えば東京から講師をお呼びしようと思うと、講演料はおろか、旅費の半額も持ち出しの条件でお願いせざるを得ない状況でした。実際、講師を引き受けていただいた方々の多くは、持ち出しOKで講師を引き受けてくれました。

そんなこんなで、ぼつぼつと講師が決まっていきました。応じてもらえたのは、主にできて間もないJCB L（地雷廃絶日本キャンペーン）のメンバーでした。彼らは自分の仕事や学業を持ちながら、JCB Lの運動に関わっていました。

彼らの志の高さ、知識の深さ・広さ、人の器の大きさは間違いなく尊敬に値するものでした。でも、私が特に教えられたのは、彼らの全ての人に対する「当たり前前の優しさ」でした。私は彼らに出会うことによって、人生の基本的な態度や人としての在り方を大いに学べた、と今も信じています。

対人地雷問題の現況

世界中の紛争地帯で大量に使用された対人地雷は1990年代には世界中で6千万個埋設されていると言われていました。未だに誰も正確な数字を知り得ませんが、仮にこの数字が正しいとしたら、2013年の今年でも5千万個以上の対人地雷がまだ世界中の大地に埋まっているはず。なぜなら、毎年世界中で除去できる対人地雷数は多く見積もってせいぜい30万個だからです。

対人地雷被害者の数は年間4千人ほどで、ずいぶん減少しましたが、まだゼロにはなっていません。通算すれば、生存する対人地雷被害者の数は全世界で20万人以上と言われています。

つまり、対人地雷を取り巻く状況はそれほど画期的には改善されていないということです。対人地雷除去のための支援と同時に、対人地雷被害者（生存者およびその家族など）に対する継続的な支援が今後も引き続き必要です。

愛妻の協力

私が今まで対人地雷問題に取り組んでこられた決定的な要素が「愛妻の協力」であることはまぎれもない事実です。

PMN2地雷



PFM地雷 ちょうちよ地雷

まずもって、このある意味「道楽」であるボランティア活動に私が参加を表明した時に、「良いことじゃないの！」と背中を押してくれました。もし、「バカなことに手をださないでよ」と言われていたら、また「そんな無駄遣いをしないでよ」と常に言われ続けたとしたら、15年間も活動を続けることはまず不可能だったでしょう。愛妻の理解と協力には本当に感謝するばかりです。

実際には愛妻と一緒に対人地雷問題に対して行動することはほとんどありませんが、2000年頃に、沖縄で行われたJCBL主催のカンボジアの対人地雷被害者・トゥン・チャンナレットさんの講演会と署名集めに二人で参加したことがありました。

沖縄の繁華街で対人地雷禁止の署名を呼びかけていると、高齢の男性が近づいて来て言いました。「こんなことしたって無駄だよ。何も変わらない。基地もなくならなかった。一緒だ。無駄だよ」。私は何と言い返すべきか一瞬言葉に詰まりました。

すると、隣にいた愛妻がはつきりした口調で、その人に語りかけたのです。「でも、何もしなければ、永遠に何も変わらないでしょう。少しでも働きかけることが（事態を）変えるきっかけになります」。それに対して、その高齢男性は何か言おうとしましたが、そのまま立ち去りました。多分、彼の頭の中にいろいろな感情が押し寄せたのだと思います。

私はその時の愛妻のキッパリした物言いと

態度にとっても感銘を覚えたことを今でもはっきり覚えています。それは、まさに最高の支援と協力でした。

そういうわけで、あなたも、もしかかボランティアでも始めようと思ったなら、かならず「相方」の承諾と支援を取り付けてください。それがあなたのボランティア活動の成功に必要な第一歩です。

なぜ対人地雷問題なのか

これもよく尋ねられる質問です。「もっと深刻ですぐに解決しなければならぬ問題があるでしょう。例えば自殺問題。引きこもり。

原発。少年兵の問題。貧困。エイズ。いくらでも緊急な問題があるじゃない」とよく言われます。過去にもずっと言われてきました。

実際その通りです。その通りですが、私が見たまま最初に出会ったのが対人地雷問題だったのです。私は、いつも出会いはある意味運命だと信じています。例えば、あなたは愛する奥様（ご主人）に出会った後に、もつと美人（美男）に出会ったからといって簡単に取り替えますか。そんなことできるわけがないですよ。

そもそも、NGO活動に携わる人間は互いに携わっている問題の軽重を比べ合いません。比較そのものが無意味だからです。単に数の問題ではないですし、ましてや優先順位がつけられる問題でもありません。私の場合には、最初に出会ったのが「対人地雷

問題」だったのです。選んだ理由はそれだけです。

世界が直面している問題はどれ一つ取っても、とても深刻で重要な問題です。だから、たまたまその問題に携わった人はそのことだけに、本当に懸命に取り組めば良いと思うのです。全部に関わるのはとても無理ですから。それに、なんだかんだとボランティア活動に文句をつける人に限って、実は自分は何もしていないというのが現実です。

対人地雷被災国 カンボジアでの出会い

この原稿を書くために過去のパスポートを全て点検したところ、2004年からこれまでにカンボジアを21回訪れていることがわかりました。ずいぶん通ったものです。

その目的は、主に対人地雷問題を通じて知り合った人たちとの交流でした。トゥン・チャンナレットとは沖縄で初めて会った時からずっと付き合いが続いています。ウマが合うのでしよう。意思疎通には英語を使います。二人の使う英語は実はかなり訛りのひどい英語ですが、互いのコミュニケーションは成り立っています。ICBL（地雷禁止国際キャンペーン）の国際大使として世界中に知られたチャンナレットですが、私と話す時は普通の父親、夫であり、素朴なカンボジア人です。

その他にも対人地雷除去の専門家である



アキ・ラーとの交流も長く、クメール・ルージュの蜜行によって失われたカンボジアの伝統絹織物の復興に取り組み、日本人の森本喜久男さんともずいぶん古い付き合いになりました。

もちろん彼らとは対人地雷キャンペーンのNGOの一員としてお付き合いが始まったのですが、だんだんと個人対個人の付き合いになり、今に至っています。

彼らとの付き合いが私のボランティア活動の骨格を形成してくれ、視野を広げてくれたと信じています。これからも、生涯大切な友人としてお付き合いしていきます。

失敗

対人地雷の講演会とホームページ運営、出前トークを中心に行っていると対人地雷問題に対して活動をしてきましたが、時にはひどい失敗もしました。

2004年の愛知万博打ち上げの席でした。隣に座った森林を守るNGOの一人と話していた時のことです。対人地雷問題について質問を受けました。どうして政府や反政府ゲリラは対人地雷を使うのかという

もので、当然調べてあるので答えました。①自軍の陣地を守る眠らない兵士として有効、②安価で大量に購入でき、取り扱いも簡単、③戦場で敵の兵力削減に有効（一人の兵士が足を吹き飛ばされるとその兵士を運ぶのに3人以上が必要）、④敵側の経済に負担を与えるなどを説明しました。

突然、そのごつい体格の30代のボランティアがぶち切れました。「お前なんかに対人地雷禁止を語る資格はない。今すぐ辞めろ」と大声で怒鳴ります。

私は何がなんだか訳がわかりませんでした。でも、よくよく聞いてみると、私の口調が対人地雷を使う側を代弁し、擁護しているからだということです。

そんなことはない。対人地雷禁止運動においては使う側の論理、心理を十分理解していなければ「対人地雷禁止の戦い」ができないから、調べて知っているだけで、決して擁護などするつもりはない。と何度も説明したのですが、まったく聞き入れませんでした。今にも殴り掛からんばかりの勢いでした。きりがないので、私は彼に冷静になるように言って一旦トイレに立ちました。彼の興奮ぶりはまるで収まる様子もありませんでした。

憂鬱な気分が席に戻ったのですが、予想に反して先ほどのボランティアが「言い過ぎて悪かった」と口先だけの謝罪をしてきました。多分周囲がなだめたのでしょう。しかし、その後も最後まで気まずい時間が流れました。

この経験を通じて、私は対人地雷問題の説明を、受け手の理解度や感情を推し量りながら話すようになりました。当初は彼の理不尽さに困惑し、怒り、落胆したのですが、今ではあれはあれで貴重な経験だったと思っています。

陸前高田市派遣中の対人地雷講座

私は2011年5月から2012年3月まで、陸前高田市に派遣されていました。ボランティアではなく、公務で自発的に行ったのですが、その詳しい話は別の機会に譲りましょう。

ここでは、その期間中に宿舍のあった一関市大東町で開催した対人地雷問題の講演会のことをかいつまんでお話しします。

この対人地雷問題講演会は宿舍の女将さんと話しているうちに開催が決まったのですが、女将さんの動員力で20名ほどの町民の皆さんが話を聞きに集まってくれました。

本当のことを言うと、こんな講演会に関心を持ってくれる人なんか誰もいないんじゃないかと心配していましたので、たくさん参加者があつて、とてもうれしく思いました。

話し始めてみると、対人地雷問題を初めて耳にする人が大半だとわかり、とてもビックリしました。講演会の名前は「被災地で考える対人地雷問題 ～私たちを忘れないで～」でしたが、皆さん熱心に聞いていただきました。



特に、被災地と対人地雷被害のある国の共通の問題を語ると、深い共感を持つたとその場で感想をいただきました。つまり、①迅速な対策がいつまで待っても行われない、②人々の中で記憶の風化が始まり、支援の量も質も下がっている、③自立に向けて具体的な取組みが早期に必要なことに参加者全員が賛成してくれたのです。

講演会の終わりに、対人地雷被災者に対しても、3・11大震災被災者に対しても、自分のできる範囲で息の長い支援をしていきたいと願って話をしました。この講演会を通じて、対人地雷の問題を世の中に訴えかけていく必要性を再確認した次第です。今後も機会があれば、東北地方で対人地雷の講演会を開催してみたいと思っています。

近い将来の計画

私は2013年7月に満60歳になりました。つまり、2014年3月末に退職するということになります。その後できるだけ早い時期にアンゴラに渡り、対人地雷被害者の状況を広範に調査し、その結果を講演会で発表

したいと思っています。

なぜなら、世界で最も対人地雷が多く埋められた国、アンゴラからは対人地雷被害に関する正確なデータが出てきていないからです。私個人としては、できれば1999年にその状況をドキュメンタリーで放映したNHKのスタッフに現在のアンゴラの状況をもう一度取材してもらいたいのですが、その実現性はまったくありません。なぜなら、対人地雷問題は、すでに過去の問題として整理されてしまっているからです。結局メディアは「新鮮なエサ」にしか興味を示さないものなのです。

で、私は少し話せる英語と、現在覚えてつあるポルトガル語を武器にアンゴラに調査のため、乗り込もうとしています。そこでの最大の問題が、現地からの招聘状です。信じられないことに、アンゴラは招聘状（公認団体からの正式な招待状）がないと観光ビザさえ下りない国なのです。

その招聘状を入手すべく、広範囲に可能性を探っていますが、今のところめぼしい成果は上がっていません。この拙文を読んだあなたに、招聘状を手に入れるための良い知恵を貸していただけるなら、とてもうれいのです。連絡を心からお待ち申し上げます。

プロローグ

ずいぶん長い文章を熱心に読んでいただい

て、深く感謝申し上げます。最後に先輩公務員としてあなたにお伝えしたいことがあります。

それは、あなたが何か「新しいこと」をやりたいと思ったら「すぐやりなさい」ということです。もちろん、準備が必要だし、仕事や私生活のことです。いろいろ大変だとは思いますが、そうとは思いますが、あなたの「やりたい」という気持ちを抑えつけないでください。我慢しないでください。またそのうちやれば良いと先延ばししないでください。実際、始めるのは今しかないのです。思い立った日が出発の日なのです。

お金も時間も作ろうと思えば作れます。作れないのは家族の（特に相手の）支援です。それは、お願いするしかありません。ディベートでも、プレゼンでもありません。あなたの思いを素直に丁寧に語り、心からお願ひするのです。

私の小さな経験があなたの背を少しでも押ししたなら、望外の喜びです。最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

◎PS

私の対人地雷問題のホームページはこちらです。時間と心の余裕がきたら覗いてみてください。少々重いサイトです。

中部地雷問題支援ネットワーク

<http://www2.odn.ne.jp/~cba31680/>